

大谷さんの思い出

坂林哲雄（協同総研前専務/センター事業団神奈川事業本部）

私が大谷さんと初めてお会いしたのは何時だったのか、今となっては記憶が定かではない。多分、7年前に協同総合研究所の仕事を始めた頃ではなかったかと思う。杉本時哉さんと二人で、代々木にあった日本生協連の会館にご挨拶に伺い、その席で研究所の会員になって頂いた。30年ぶりに協同組合原則が改定された年で、マンチェスターのホテルで会った際には、議決までの裏話などを聞かせて頂いた。語学音痴の私にとっては、大谷さんの諸外国の協同組合関係者との交友が、一際まぶしいものを感じられた場面であった。

その後、大谷さんの幅広い交友関係と深い経験は、研究所や日本生協連の活動を大いに支えて頂くことになる。その時は勿論そんな風になるとは思ってもいなかった。大谷さんが研究所の活動に関わられた時、研究所では労働者協同組合法と高齢者福祉が主たる研究課題だった。大谷さんから諸外国の労働協法を研究するならILOだと、今ならILOに協同組合関係のセクションが存在することは、私たちの常識になっているが、大谷さんからILOが協同組合に力を入れており、協同組合づくりを指導する第一歩が法律なんだという

話を伺って、ジュネーブへ調査に出向くことになった。私たちが本格的に海外の協同組合法を研究するのはそれが最初だったような気がする。それまで海外の労働者協同組合といえば、イタリア、スペインなどヨーロッパの活動で、そこが主たる研究対象だった。労働協法の研究過程で先進国の協同組合法を比較対照にしようということになり、日本への紹介は少ないが、アメリカ、カナダでも労働協法が可能であるということがわかり、大谷さんと堀越さん、私の3人で、現地調査にゆくことになった。シアトル、バンクーバー、カルガリー、サンフランシスコ、ワシントンDCと北米5都市を巡って、現地の労働協法活動を調査し、法律の専門家からも話を伺った。この10日間が大谷さんとの一番の思い出である。サンフランシスコにあるマノスというセンター事業団そっくりの活動をしている協同組合では、翻訳をめぐる「そんなこと言うんなら貴方が通訳しろ」と怒鳴られたり、中華料理店を出たところで若い女子学生の集団と遭遇、酔っていた勢いもあったろうが「How young are you?」とおどけて見せたり、カルガリーでは飛び込み営業ならぬ、飛び込み調査まで行なった。サンフランシスコでは古くからのご友人である安河内さんにご案内頂いた。NCBAでも新会長以下貴重な時間を割いてレクチャーを頂いた。大谷さんの人脈があったことである。考えてみるととんでもない強行スケジュールだったが、時として脱線

しながらの楽しい調査だった。

研究所の所報「協同の発見」にも沢山の寄稿をして頂いた。その中の一つレイドロー博士についての文章が特に私は好きである。実際に交わった人でなければ書けない“秘話”の一つだと思う。語彙の乏しい私は、英語のインデックスの校正を毎回大谷さんをお願いしていた。

議論をすると、時として声を荒げる真っ直ぐな考えを好む人だった。気難しさを感じる時もあったが、私のような若輩者の話にも耳を傾け、沢山のアドバイスを頂いた。特に、研究所時代はお会いする機会も多く、余りお酒は強いほうではなかったが、赤ワインが好きで良くご一緒させて頂いた。

そんな大谷さんとの交際も病気をされてからは少ないものになっていた。特に私が昨年センター事業団の仕事をするようになってからは研究集会などでお会いする程度であった。最後に飲んだのは何時だったか。昨年暮れに一度お誘いを頂いたが、時間の都合がつかなかった。今から振り返ると残念でしかたない。協同組合運動にかけては経験と知性があり、情熱の塊のような人だった。私にとってはかけがえのない人であった。

< 大谷正夫氏との思い出 >

富田孝好（セナー事業団東北事業本部）

大谷さんの悲しい知らせを聞き、本当に残念です。大谷さんとは私が日本労協連・事務局長として勤務をしていた時のことが思い出されます。特に思い出として残っているのは、2度の海外出張でごいっしょした時のことです。1回目は1999年の秋に日本労協連・20周年記念ツアーでごいっしょした時、2回目は2000年の春にICAアジア・太平洋地域総会でごいっしょした時です。

20周年記念ツアーでは、同年が国際高齢者年の年でもあり、IFA（世界高齢者団体連盟）の第4回の世界大会に出席し、同行した仲間とともに大変お世話になったこと。また、そのツアーでは大谷さんのご尽力により、ビクトリア大学のマクファーソン教授との懇談の場が設定され、教授より貴重なお話しを聞く機会を得ることができました。また、ICAのアジア・太平洋地域総会では1週間にわたるシンガポール滞在中、国際会議初出席の私にいていねいにいろいろなことをアドバイスしていただき、感謝の念でたえませんでした。帰国後も報告レポートをまとめる作業にもいろいろお手伝いいただきました。

このような大谷さんとのお付き合いの中